

文化と情報メディア

著者	飯田 卓
図書名	文化人類学. 内堀基光, 奥野克巳編著. 改訂新版 (放送大学教材, 1554778-1-1411)
開始ページ	117
終了ページ	128
出版年月日	2014-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008505

9 文化と情報メディア

飯田 卓

《目標&ポイント》 人と人が挨拶を交わし、その時どきの用件を伝えること。あるいは、家族や隣人、仕事仲間とコミュニケーションをとること。こうした日常場面の何気ないことからは、文化の問題に深く関わる。また現代では、声や身ぶりといった身体的能力に加え、地球規模で整備されたインターネット網など、さまざまな装置や制度によってコミュニケーションが成り立っている。本章では、こうしたコミュニケーション一般に着目し、情報メディアという観点から詳しく考えてみたい。

【キーワード】 コミュニケーション、対面的、文字、デジタルメディア、高度メディア社会

1. コミュニケーションと文化人類学

コミュニケーションという英語は、伝達、報道、交通などと訳される。伝達や報道は、二者または多数のあいだで情報の受け渡しを行い、受け手に何らかの理解をもたらそうとする試みである。はっきりした受け手がいない場合、たとえば漂流者が手紙を瓶に入れて流す場合なども、情報の受け手がいることを想定する限り、コミュニケーションと言ってよい。

交通に関わってコミュニケーションという語を用いることは、日本語の場合には比較的少ない。しかしこの場合も、物質の輸送によって、受け手に利益や変容をもたらすことが試みられている。コミュニケーションとは、情報や物質の受け渡しにより、関係者の変容（とくに理解）を

もたらずこととまとめられよう。

情報メディアという表現は、じつは冗長である。日常会話でも、メディアと言えばふつうは用が足りる。情報という語を入れたのは、この章が情報の受け渡し（コミュニケーション）に関わることをはっきりさせたかったからである。

コミュニケーションの問題は、社会学や心理学、さらには両分野にまたがる社会心理学などにおいて論じられてきた。文化人類学がこの問題に着目するのには、二つの理由がある。一つは、人類史をつうじて発明されてきたさまざまなコミュニケーション手段が、文化や社会のあり方に強く関わってきたこと。文化とは、言語その他の手段によって身の回りの事象を理解可能に組織していく手段なので、コミュニケーション手段が多様化し、言語が伝わる時空間が広がれば、文化のあり方は大きく変わる。

典型的な例として、文字使用による社会変化をあげられよう。統治者の方針が伝言によって伝えられる社会では、コミュニケーションを重ねるあいだに憶測や独断が混じり、当初の統治方針が十全には伝わらない。しかし、それを文字によって伝える社会では、伝達のあいだに内容が変わってしまうことはないし、時間の経過によって忘却される可能性も少ない。地理的な統治の範囲も、おのずから広がることになろう。文字使用の有無は、統治機構のあり方を大きく左右するのである。

文化人類学がコミュニケーションに関心を示す第二の理由は、それが方法論に大きく関わるからである。本書でも繰り返し論じられるとおり、文化人類学では、フィールドワークが方法論の基礎に置かれてきた。フィールドワークとは、つきつめて言えば、文献調査に頼らずに（あるいは、文献調査以上に）対面的コミュニケーションや実地観察を重視する調査方法である。そのように考えるなら、対面的コミュニケーション

の重要度が高い社会ほど、フィールドワークに基づいた文化人類学的方法の有効性が高いと言えよう。このような社会では、構成員が記録を残すことは少なく、調査にさいして記録資料をあてにできない。したがって、好むと好まざるとに関わらず、社会のなかに身を置いて対面的コミュニケーションを観察し、調査者自身も対面的コミュニケーションに参加して情報を引き出すことになる。

とはいえ、人類の普遍性と多様性を広く研究しようとする文化人類学は、このようにフィールドワークに適した社会だけを扱うのではない。さまざまなコミュニケーション手段を選べるような社会についても、知見を集める必要がある。そのためには、文化や社会とコミュニケーション、メディアとの関わりを、しっかり踏まえておかなければならない。

2. 対面的コミュニケーションから間接的コミュニケーションへ

文化人類学がメディアに関心を寄せる二つの理由のうち、どちらに着目するにせよ、対面的コミュニケーションの性質を整理しておいたほうがよいだろう。

文化人類学の巨匠のひとりC・レヴィ=ストロースは、『構造人類学』において近代社会を批判するくだりのなかで、文字の発明が人類にもたらした福利と損失について述べている。彼によると、文字使用によって人類が失ったものとは、隣人を一人の人間として包括的に理解するような、生きた接触に基づく人間関係である。こうした人間関係が近代社会にまったく見られないわけではない。しかし近代社会ではしばしば、具体的な人間関係よりも、メディア（書物や文書）をつうじた抽象的で間接的な関係が大きな役割を果たす。その結果、市民による社会への働きかけも間接的なものになり、社会の自律性が失われる。

レヴィ=ストロースによれば、社会の自律性が無条件に担保されるのは、すべての人が顔見知りであるような500人規模までだという。文字をはじめとするメディアが発達し、社会が複雑になると、「まがいのもの」の人間関係が支配的になるというのが彼の主張である。500人という数字が妥当かどうかはともかく、人口規模が変わるとコミュニケーションのあり方も変わるという指摘は重要である。

人口規模の小さな無文字社会では、ほとんどの場合、話し手と聞き手が面と向かってコミュニケーションをすませってしまう。この場合のメディアは、声と身ぶりである。話し手が、自分の身体に備わった器官でコミュニケーションをすませってしまうのである。ほかにも、やや離れた場所の相手にのろしで合図したり、後から来る者のため草を結んだり石を積んだりして合図する、などの場合もあっただろう。しかしこれらの「メディア」は、あくまで補助的なものに過ぎなかったと想像できる。

社会の規模が大きくなり、顔見知りのあいだだけでコミュニケーションがすまされなくなると、さまざまなメディアが使われるようになる。文字もその一つだが、別の手段を発達させた社会もある。たとえば西アフリカ各地の社会では、王室の歴史を後世に伝えるため、図像や彫刻にそれを記録した。この方法を用いれば、不特定多数の「読み手」に対して、時間を超えて歴史を伝えることができる。ただし、文字にくらべると、細部にわたる厳密な叙述が行えず、ときには図像に合わせた史実の改変もありうるという。このためもあり、図像表現を発達させた社会でも、現在では、文字によるコミュニケーションが重要になっている。

また、声による伝達も用いられたが、王自身が歴史を語るのではなく、王の求めに応じてそれを語る専門職（語り部）を養成し、記憶を代々継承するという方法をとった。この方法で伝承を確実にするためには、専門家の継続的な養成が不可欠であり、維持コストが高い。口頭伝承から

文字記録への転換は、長い歴史のなかではごく自然な成り行きだったと思われる。日本の『古事記』なども、語り部が伝えていた記憶を文字化したものである。

文字の登場が社会を大きく変えたことは、比較的多くの研究が指摘してきた。たとえば、次のような説明がある。文字の発明により、人間の記憶力を上まわるような論理の連鎖を記録できるようになった。そのことによる大きな成果の一つが、ギリシャ人の哲学である。ある種の分野においては、個人の経験を別の個人に継承することが文字によって容易になり、それによって人間の知的活動が活性化したというのである。

ただし、文字が発明されたからといって、コミュニケーションのすべてがそれに依存するようになったわけではない。文字が発明されたからといって、話すのをやめた人がいたわけではなかっただろう。文字記録にも、さまざまな欠点がある。図像ほど精密に形状を写実できないし、口頭伝承ほど生活場面に浸透するのは難しく、したがって生活そのものを変化させるには至らないことがある。さらに、文字が発明された当初は、紙などの記録媒体が入手しにくかった。このような事情から、多くの社会は、文字の発明後も旧来のメディアをさまざまに使い分けながら社会を成り立たせてきたと言える。

3. 印刷とデジタルメディア

対面的コミュニケーションに大きく頼る社会と、文字や図像、語り部などを補助的に使う社会とを、ひとまず対比してみた。これによって、文化人類学がメディアに関心をもち第一の理由（メディアの多様性と社会の関係）は、およそ説明できたと思う。第二の理由（メディアと人類学の関係）については、次節で詳しく述べよう。本節では、その後に開

発されたメディアのインパクトについて補足しておきたい。

その一つは活版印刷である。この技術は古くから中国で用いられていたが、15世紀中頃、ドイツのゲーテンベルクが同じシステムを「発明」し、聖書を大量に流通させて宗教改革を後押しした。この技術がヨーロッパ社会に大きな変化をもたらしたのは、メッセージをほぼ正確に複製し、大量の読み手に届けたからである。中国では多種類の漢字を使うため、活字を用いても大量印刷には依然コストがかかったが、数少ないアルファベットで文章を作るヨーロッパでは、未曾有の規模で新しい読者が生まれた。マスメディアの誕生といってよい。

メッセージの正確な複製は、国家規模の広い範囲でニュースや価値観の共有を生み出した。このことは、18世紀以降、世界各地で市民革命を促し、国民国家を生み出すという効果を伴った。小説や新聞を読むという個人的行為は、それを同じように読む他者との結びつきを、容易に想像できるようにするからである。これによって、市民の自発的なナショナリズムによって支えられる国家が登場し、それまでのように権威をとおして多数の臣民をしたがえる国家は、勢いを弱めていく。

国民国家の登場以降、産業革命の進展により、電信や写真、石版印刷、映画、ラジオ放送、テレビ放送、ビデオ録画などが発明された。それぞれの発明は、それぞれに新たなメディアを生んで、社会を変えたと言える。とはいえ、文化人類学との関わりでは、デジタルメディアの普及がもっとも重要であろう。

ここでデジタルメディアと呼んでいるのは、インターネットをつうじて授受できるような写真・音声・動画・テキスト(デジタル情報)を使ったメディアの総称である。デジタルビデオやDVD、スマートフォンなどはインターネットから独立したメディアだが、そのコンテンツは他のメディアとのあいだで授受できるので、デジタルメディアに含めること

にする。これらのメディアは、インターネットの普及が始まる1995年頃から、無視できないものとなってきた。

こうしたメディアが重要な理由は、第一に、マスメディアの恩恵を受けてこなかった人たちをコミュニケーション範囲に組み込みつつあることだ。書籍や新聞は、文字を知らない人には読めないし、映画も、映画館から遠く離れて住む人には見られない。テレビにも放映圏があって、自由には見られない。ところが、VCDやDVDの登場により、家庭用のビデオデッキとテレビ、発電機を携えた商売人が、電気のない僻地でもハリウッド映画などを見せるようになった。映画の巡回上映は戦前の日本などにもあったが、その規模は現代のDVDの比ではない。

第二に、デジタル情報は、インターネットを經由して国境を越える。出版や映画配給、テレビ放映は、いずれも、一つの国を活動範囲とする企業が担う。しかしデジタル情報は、そうした企業活動とは無関係に流通するので、国を越えた人間関係を強化する傾向にある。これは、今までのマスメディアにはなかった特徴である。

第三に、パソコンをはじめとするデジタル技術の普及により、高価な設備を必要とするコンテンツ製作が安価でできるようになった。このことにより、マスメディアをとおしてもっぱら情報を得ていた読者・視聴者が、情報の送り手に転じるようになった。このことは、ユーチューブによって個人的な動画が大量に配信されるようになったことに象徴されていよう。このことにより、文化産業から縁の遠かった個人の表現者や、政治的なマイノリティたちがみずからの声を広く伝えるようになった。

これらの現象はいまだに進行中で、今もなおメディアによって世界が変わりつつある。

4. 高度メディア社会のフィールドワーク

現代においてはメディアがますます多様化し、対面的コミュニケーションの役割は相対的に低くなったように思われるのに、なぜ、文化人類学者はフィールドワークにこだわり続けるのだろうか。フィールドワークが明らかにできるのは、せいぜい、対面的コミュニケーションが人間関係の基礎となる場合に限られるのに。

フィールドワーク以外の方法を利用することは、メディア研究では重要である。たとえば、アンケートにもとづく量的資料や、通信や放送に関わるさまざまな履歴を用いれば、個人によるフィールド調査ではわからないメディア利用の動向を多面的に明らかにできる。しかし、フィールドワークにもとづく文化人類学的方法もまた、他の方法に劣らず依然として重要である。

その理由を述べるために、文化人類学史と社会学史の接点を、もう一度ふり返ったほうがよいだろう。産業が成熟し、国家が近代にふさわしい制度をさまざまな形で整えていた19世紀後半、フランスではE・デュルケームが社会学を創始したが、それは文化人類学と区別できない状態にあった。デュルケームが後継者と目した弟子のなかに、『社会学年報』の編集をまかされたM・モースがいる。彼は、デュルケームの甥にあたる。彼は、イギリスで勢いを得ていた社会人類学者やアメリカの文化人類学者らと親交し、みずからは民族学研究所を創始した（1926年）。まさしく、社会学と文化人類学のはざまに生きた人である。

モースは、未開と呼ばれていた諸社会を、文献をつうじて考察するという方法をとったため、フィールドワーカーとはふつうみなされない。しかし、近年のモース研究によると、モースの文献研究は、彼が深く関与した協同組合運動に関わっていたという。ソヴィエト連邦の成立やス

ターリニズムの台頭という政治状況のなかで、協同組合の普及と民族学研究によって「人間の活動のありようを根底から見直す方途を探っていた」というのである（モース研究会（編）2011）。この見方に立つならば、彼は協同組合運動という「フィールド」に身を置きながら、レヴィ＝ストロースのいう「生きた接触に基づく人間関係」を近代社会で回復するために、文献研究を進めていたことになる。

ここでは、モースと同じ立場に立つよう読者に呼びかけているわけではない。文化人類学の探究が、近代化やグローバル化によって生じた人間関係のひずみを正す可能性があることを、あらためて強調しておきたいのである。この点は、一般的な社会学との大きな違いである。

ひずみと言って悪ければ、次のように言うこともできよう。対面的コミュニケーションと間接的コミュニケーションの決定的な違いは、コミュニケーションの文脈が保持されているかそうでないかである。対面的コミュニケーションでは、情報の受け手と送り手が同じ時に同じ場所で顔を合わせており、相手の状態をその場で確認することができる。これに対して間接的コミュニケーション（たとえば手紙）では、相手がどのような場所でどのような時に発信を行ったか（手紙を書いたか）が明らかでないため、誤解を生じる余地が高い。したがって、間接的コミュニケーションの累積に支えられる社会では、商品偽装や捏造などの問題を払拭できない。人間活動を広げるためのメディア技術が、脱文脈の力によって、人間関係を不透明なものにしているのである。こうした矛盾を緩和するためにも、フィールドワークの視点を取り入れた文化人類学的なメディア研究が必要だろう。

方法としては、フィールドの人たちがメディアと接するやり方を直接に観察するのが有効である。これは、フィールドワークという対面的コミュニケーションによって間接的コミュニケーションの性質を明らかに

するための基本である。こまかな点では問題も多いが、この方法によるメディア研究は成果をあげてきており、社会学やカルチュラル・スタディーズといった他分野でも応用されつつある。

前節で述べたように、デジタルメディアの普及によって、人びとが生活する世界は大変動を起こしていると言っても過言ではない。文化人類学とメディア研究が重なる領域は、今後、ますます重要性を帯びるだろう。

5. メディア利用は進化するか

前節までの記述は、やや図式的に過ぎた。誤解を避けるために付け加えれば、すべての社会が無文字社会から文字社会へ、さらには印刷社会、電子メディア社会、デジタルメディア社会へと、段階的に発展してきたわけではない。図式的な説明は、古代的生産様式から封建的生産様式、ブルジョア的生産様式へと社会の変化を区切るマルクス主義理論を思わせる。社会の発展段階は、生産様式でなくコミュニケーション様式に特徴づけられる、というのが図式的説明である。

こうした考え方には難点がいくつかあるが、最大の難点は、ある一つのコミュニケーション手段が一つの社会の内部で完結するかのように思わせることである。確かに、ある時代の印刷メディアや電子メディアは、言語と歴史を共有する（と想像できる）国民国家の範囲内でのコミュニケーションを担っていた。しかしコミュニケーションとは、その性質からして、さまざまな他者にまで広がる可能性をもつ。このため、地理的に接している二つの国が異なるコミュニケーション様式をもつと断言できるような条件は、きわめて限られている。

また、すでに述べたように、デジタルメディアが出現した現代でも、

すべてのコミュニケーションがデジタルメディアをとおして行われることはまずありえない。少なくとも、人類史のもっとも初期からあった声や身ぶりは依然として併用され、他の多くのメディアも併用されていることだろう。一つの社会を一つのメディアで代表させることは無理である。

隣り合うA社会とB社会では、それぞれの社会を成り立たせるうえで、異なるメディアに重きを置いているかもしれない。そして、両者の比較には社会学的な意味があろう。しかし、A社会とB社会のどちらかが進んだ段階にあるわけではない。むしろ問題とすべきは、なぜ両社会でコミュニケーションが活性化し、メディア利用が均等にならないのかということだ。おそらく、言語や慣習、法制度、インフラなどの違いが、どちらかの社会の自由なメディア利用を制限しているのだろう。だとすれば、メディア利用やコミュニケーションの違いに進化的段階があるわけではなく、この問題には文化的相対主義の立場で臨むのがよい。

一部の文化人類学者は、文字の利用によって社会が大きく進化したと考えている（典型的にはJ・グディ）。しかしほとんどの場合は、文字利用が社会の変化を加速すると論じているのであって、その後におけるメディアの発明がすべて同じように重要だと述べているわけではない。また、詳しく検討してみると、文字の普及は発明後すぐに進展したわけではなくて、紙や印刷技術など、関連する複数のメディアの発明によって段階的に進展している。

同様に社会の変化を加速していくメディアとしては、デジタル技術を駆使した一連のメディアがあげられる。デジタルメディアの普及した現代において、ある地点で発明されたメディアは、時をおかずして地球大に拡散していく。このような状況では、もはやメディア利用の観点から社会の範囲を区切ることはできず、ある社会とある社会の優劣を較べる

ことにも意味はない。

このことに関してわたしが思いだすのは、2008年以降調査を続けているマダガスカル山村地域である。ここでは公共の電気が引かれておらず、自動車も地域の入口までしか到達していないが、にもかかわらず携帯電話を使う人が少しずつ増えてきた。充電はよその町ですませることが多い。そこにいる人と話していたとき、新年の挨拶を電話で交わす約束をして、次の年の正月にはわたしから国際電話をかけて新年を祝うことになった。

また、この地域の村落開発を担当していた地方役場の役人から、知人たちの近況を電子メールで知らせてもらったこともある。彼は出張でこの地域を訪れたさい、わたしの知人たちをスマートフォンで撮影し、首都のネットカフェからわざわざわたしに送ってくれたのだった。

わたしの知人たち自身は、まだインターネットを使いこなすわけではないが、離れていたと思っていた地域が一足飛びに近づいているのを実感する。まさしく距離の縮小がそこにはある。映画や音楽について地球の表と裏で共通の話題を探すのも、だんだん容易になっていくにちがいない。

デジタル技術は、このようにメディア利用を地球大にまで拡大した。また、ユーチューブやフェイスブックのように、利用の場面や目的を異にするさまざまなメディアを生みつけてきた。さまざまなメディアが増殖し、それによってコミュニケーションのあり方や規模が急速に変わりつつあるのが、デジタル技術のもたらした現代といってよい。